

要 旨

ネットワーク社会の進展と大学図書館の役割の変化

真 部 理 恵

ネットワーク社会が進展している。今後、さらに進展すると考えられる。その中で大学図書館が旧来の役割だけではなく、新しい役割を必要とされている。どのような役割が必要とされているかを考察するのが本論文の目的である。

かつて図書館は世界に点在する知識の倉庫であった。図書館の知識ストックは量的にも質的にも個人のもつ知識ストックを圧倒していた。知識ストックをもっているというだけで、図書館は価値のある存在であった。いっそうの知識を収集し、その知識を保存し、ユーザーの利用のため知識を整理し、ユーザーの要請に応えられるよう検索技術を開発し培ってきた。情報量の増加に従い、図書館単館のみで、ユーザーの要請を充足できなければ、図書館同士のネットワークを構築し、変化、発展してきた。

しかし現在の図書館は情報ネットワーク技術の発達により大きな変化を迎えている。図書館所蔵資料として、旧来の紙の資料に加えて、電子ジャーナルといった電子資料が出現している。図書館の外部には質と量の両面で圧倒する情報ネットワークができ、その検索容易性や満足度の高さから、図書館の価値は急落し、図書館の利用は減少した。

情報技術の進展により、図書館学、図書館情報学で蓄積してきた情報蓄積と検索の技術は、図書館を仲介しないネットワーク上の情報蓄積、ユーザー本人による検索に移行している。旧来の役割の整理の時期、新しい役割の模索する時期となっている。

旧来の図書館は、情報蓄積、探索技術による客観的な情報提供という立場を保ち、図書館という場所で待機し、来訪するユーザーの利用を支援した。今後の大学図書館は、旧来の図書館でユーザーを待つ物理的な場所を保持しつつも（「場所としての図書館」）、大学全体を図書館と捉え、その役割を果たす「図書館としての場所」を整備し、提供要求者の知識生産により深く働きかけることが要求されており、そのための役割が今後の図書館に求められている。

第1章では、大学図書館の役割について検討する。大学図書館は大学と図書館の役割の重なるところに存在する。大学は研究・教育活動を通して社会の成長と発展と人材育成に貢献する。他の種類の図書館と違い、大学図書館を特徴付けるのは研究者が研究活動による知的生産を行い、その知的生産物を収集、保存、流通をしてきたことであるが、今後はそこに知的生産を支援する立場が加わると考える。

第2章では、大学図書館はどのような役割を果たしてきたかを、外国・日本の歴史を整理する。ヨーロッパにおいて大学は発生し、その付属機関として図書を保存する図書室が持たれた。その教育は宗教に必要な人材の育成や、ジェントルマン育成であり、教科書が必須であったが、そこに図書館は必要なく、ただの保存庫であった。そこから、宗教ではなく、啓蒙思想を基本理念とした近代的大学では新たな知識創造が大学内でなされ、図書館は、知識を保存することで発展した。その後、その流れはアメリカに移り、戦後、日本に新制大学が導入された際に、大学図書館も導入された。

第3章では、大学図書館を取り巻く社会の動向変化をネットワーク社会の進展として整理する。情報技術の発展の流れを挙げ、ネット世界の進展により情報の集積による集合知と専門知識である専門知についての検討、ネット進展という社会的背景による利用者行動の変化、高等教育の背景の変化、研究の

変化について幅広く検討する。

第4章では第3章で挙げたこのようなネットワーク社会の変化が要請する大学図書館が担うべき新しい役割とは何かを、「図書館としての場所」という観点から検討する。

第5章では、第4章と関連させて、アメリカと日本における事例を紹介する。

「図書館としての場所」の事例として、イリノイ大学の事例を検討する。「場所としての図書館」の事例として、お茶の水大学附属図書館等を検討する。

第6章では、時代の要請する大学図書館の役割を果たすよりよい将来像について提案する。

しかし、現在は図書館の歴史でも最大級の過渡期にあり、図書館が図書館のなかにある蔵書ではなく外部になる情報に基づく情報サービス拠点となるための試行錯誤が継続しておこなわれるであろう。